

時の流れの生き証人



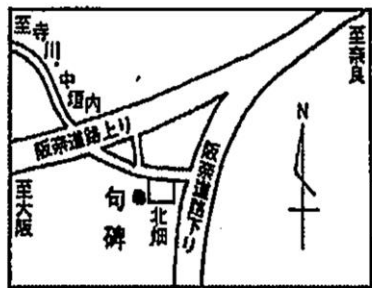
大文字茶屋跡句碑

龍
間

現在の阪奈道路の上り車線と下り車線が分かれています。昔、大文字茶屋という峠の茶店があった。今ではそこに盛つた北畑好子さん宅と北畑さん宅西側の山腹の巨岩に「嘉永三(一八五〇)年に刻まれた俳句だけが茶屋

の跡をしるのばす。

この茶屋は、河内と大和を結ぶ街道筋にあり、中垣内、寺川から急な坂道を登りついたところでもあった。そのため旅人は必ずこの店で一服したという。茶屋を営んでいた北畑さん一家にも当時を詳しく知



る人は今はおらず、茶屋が斜面に沿って段状に残っていたことと、俳句が刻まれた岩の横に小さな滝があり、旅人は縁側から眺めながら休息したことが伝えられている。

巨岩には、縦二桁、横一・五桁にわたって、「家安禮整元日毛阿里谷の底」と変体がなを用いて建築で刻まれ、「家あれば 元日もあり 谷の底」と読む。

時の流れの生き証人

角ノ堂銘のある碑

御供田二丁目



今は使わなくなった角ノ堂(すみのどう)の文字を、御供田二丁目三十一三の安楽寺横の地藏堂前で見ることが出来る。安政三(一八五六)年に建てられた高さ約六十センチの石碑から「願主角ノ堂米安」とはっきり読める。地名の由来について住道町の公文書に「其の地域内に角堂と呼べる地名あるに

みとることができる。

因り住道村と名付く」とある。角堂は横山新田のなかの一小字で、斐屋川と恩智川の合流地点にあった。近世中期から斐屋川筋剣先船の拠点として栄え、野崎観音や生駒聖天、石切神社の参拝客がここで船を降りて歩いてゆく者が多かったため、角堂の名は大阪市中や近郊にはよく知られていた。

